

# 家庭的な小集団生活施設における地域生活支援(1)

## —共同生活の家「なずな園」の実践をとおして—

岩 永 靖

### 1. 背 景

日本における障害者福祉は、大きな転換期に来ている。大型施設入所福祉から地域福祉へ、措置から契約への流れの中で、2006年障害者自立支援法が施行され、サービス体系が大きく変化した。従来の大集団の大型施設から小規模で目的、ニーズに応じたサービス体系に移行してきたと言える。

また、1981年の「国際障害者年」とその後続く「国連・障害者の十年」による影響により、ノーマライゼーションの理念が広がり、障害者基本計画では、「ライフステージの全ての段階における全人間的復権を目指すリハビリテーションの理念」、「障害者が障害のない者と同等に生活し、活動する社会を目指すノーマライゼーションの理念」、また「併せて国民の誰もが障害のあるなしにかかわらず相互に人格と個性を尊重し支えあう『共生社会』の実現をめざす」という考え方が示されている。

地域における小規模施設やその多様な福祉サービスにより、ノーマライゼーションの理念にもとづいた支援がどのようにすれば可能になるのかということは、今後の障害者福祉の目指す方向性とも言える。

そのような中、38年に及ぶ長期にわたり家庭的な小集団生活施設として、地域の中で障害者が共同生活を送ってきた「なずな園」の実践から、その課題に対する支援のあり方を考察したい。

### 2. 目的と方法

長期にわたり地域で共同生活を営み、個々の障害者の地域での自立生活を可能にした共同生活の家「なずな園」の実践を研究することにより、小集団を中心とした地域での生活支援のあり方を探ることを目的とする。

方法として、「なずな園」における文献研究並びに関係者のインタビュー、「なずな通信」等の資料を基に、支援のあり方を様々な援助理論にもとづき考察していく。

### 3. 共同生活の家「なずな園」の概要

「なずな園（当時のなずな寮）」が設立されるのは、1962（昭37）年の11月1日である。グルー

プホームなど地域福祉サービスが全くなかった時代から、主宰者の近藤原理（1931-）夫妻が近隣のスタッフ2名の協力を得ながら、自宅で10名前後の障害者と2000年まで長期にわたり共同生活を続けてきた実践である。

高校卒業後、小学校教員3年、あと山口県で精神薄弱<sup>1</sup>児施設や特殊学級の仕事を6年続けた原理は、昭和34年長崎県へ戻り小学校へ勤務しながら、父が運営していた「のぎく寮」（のちの「のぎく園」）へ住み込み、障害児の生活指導にたずさわった。

「のぎく寮」は、原理の父益雄（1907-1964）が、1950（昭25）年小学校校長職を辞め特殊学級を作り、障害児の教育にたずさわりながら自宅にも知的障害児をあずかり、生活教育に取り組んできたところである。益雄の先駆的な障害児教育の実践は多くの著書や研究論文で紹介されている。

「のぎく寮」に住んで障害児とかかわってきた原理は、障害児の将来、また生涯にわたって支援が必要であることを考えたときに、成人知的障害者のためのそのような場が必要であると、「のぎく寮」から1km半ほど離れた丘に小さな家を建てた。そこに成人に近い6名と原理夫妻と2人の息子が一緒に暮らし始めたのが「なずな園」の始まりである。私的な共同生活のため公的な助成など一切なく、益雄や妻美佐子の教員退職金と善意のカンパによって設立された50坪ほどの木造の家であった。

設立の前日、原理はその思いをこう記している。

「のぎくの花が咲いてちょうど9年になる。この貧しい花を9年という月日を守るのは容易ではなかったが、今ここに新しいのちを、さらに生み出すことができたことを、このうえなくよろこんでいる。新しいのち—それは、のぎくよりもっとささやかで、ほとんど目だたない草、『なずな』のことである。ちっぽけでも大地に根をはり、ふまれてもふまれても根強く生きるのが『なずな』である。（昭和37年10月31日）」（近藤原理、1965）

「なずな園」の名前は松尾芭蕉の俳句「よく見れば なずな花咲く 垣根かな」から名づけられた。

その「なずな園」を通して原理が目指したものは、何であったか。開設当初の著書の中で以下のように記している。

「なずなの生きる道は、精薄<sup>2</sup>者の生きる道である。「生きていてよかった」—そんな思いを本人もまわりもするような人生をおくらせたい。わたしどものしごととは、そのためにある。（中略）わたしは、今のこうした苦労が将来国の力で発展していくであろう成人精薄者福祉のために、何らかの貢献をしようと思っている。だから、わたしはこれからもこの道を休まず歩く。」（近藤原理、1965）

この思いはその後の著書でも変わらず記されている。「なずな園」が変わらず求めてきたものは、「生きていてよかった」そんな思いができる人生を作り出していくことであった。その中で必要な心構えとして、原理は「彼らの側に立つ」という言葉をよく使っている。「自分が障害者だったら」と置き換えて考えてみる。「暮らすとしたらどんなところで暮らしたいか」を考える。その中で原理は、山口の精神薄弱<sup>3</sup>児施設「ときわ学園」での経験から隔離的大集団でなく、家庭的な小集団施設がよいと考え、地域に融けこみ、いずれは消えていく小さな家庭的生活塾でありたいと願った。そして当時の一般施設を隔離型大集団収容施設と称し、「なずな園」を家庭的な小集団生活施設と位置づけた。その後、法人化せず自宅でのボランティアという形で運営を続け、1軒の農家として障害者が力を出し合い、地域とも交流してきた。そして障害者を自宅で看取り、葬儀に

は近所の方が炊き出しを手伝いに来られるほど地域にとけ込むことになった。

#### 4. 共同生活の家「なずな園」における支援

##### 1. 個と集団の共生—試行錯誤期

ここで「なずな園」の日常と支援について述べる。

「なずな園」は原理夫妻とその息子2人と障害者10名前後の共同生活に、昼間近隣のスタッフ2名で取り組んでいた。日中の活動は農業を中心としたもので、自給自足の時期もあり、養豚なども行い、出荷もしていた。

その日常は表1の通りである。

表1 なずな園の日課 (1979年当時)

	炊事	
6:00	— 起床 洗面 掃除 ラジオ体操 かけ足	
7:00	— 朝食	
	働ける人は近くの工場へ 息子2人は学校へ	
8:00	— 仕事始め	
	・豚、山羊、鶏	
	・農耕、園芸、果樹、しいたけ	
	・精米、買物、散歩、病院治療	
	・その他	
11:30	— 仕事終わり	
12:00	— 昼食	
13:00	— 仕事始め	
	*雨・雪は室内で仕事	
	*真夏の午後は自由に	
15:30	— 仕事終わり	
16:00	— 掃除	
17:30	— 工場勤めの者が帰園	
18:00	— 夕食 日記	
19:00	— 夕べの集い	↑ 入浴 ↓
	おやつ	
21:00	— 床につきはじめる	

(近藤原理、1979)

この日課に基づいた日常は指導したり、管理するのではなく、それぞれができることを出し合い、共同生活を成り立たせてきたものであった。例えば、重度の脳性麻痺で言語障害もあるA氏は、時計係として仕事の終わりの鐘を鳴らす役割である。また自閉性障害のあるB氏は、一人仕

事ができるように芋畑の管理や受付係で来訪者の名前などを覚えていた。また、Cさんは草運びを主な仕事としていた。

このことを原理は「役割出番」といった。それぞれが共同生活の中で、「役割出番」を持つことで生活を成り立たせ、公的援助を一切受けず、一軒の農家として自立してきたとも言える。

では、どのようにしてこの共同生活を作り上げてきたのだろうか。原理は新しい仲間が入ってくると試行錯誤から始まったという。

例えば、自閉性障害のB氏の場合、原理は当初から一人仕事をさせた方がいいと考えていたわけではなかった。当初知的障害とみて、みんなの中に集団の中に極力入れようとした。しかし、本人は離れていく、そして様子を見ておくと一定の距離以上離れていくことはない。そこで本人の心地よい距離でできる仕事ということで一人仕事の洗濯をしてもらうようになった。また重度の知的障害者D氏の場合、水遊びが凄まじかった。風呂、洗面所、足洗い場、豚舎などのありとあらゆるところで水を振りまいていた。そこで原理は6坪ばかりのミニプールをつくった。みんなの水遊びや物洗いなどにも使うためである。D氏はそのミニプールで大いにはしゃぎ遊んだ。そうして他の場所での水遊びは減っていった。また、D氏は弄便もひどかった。原理は、触れたりして物を把握している時期だと考え、外では土遊びを自分の部屋では粘土遊びしっきりさせてみた。こうして共同生活に慣れ、弄便もなくなっていった。このように仲間が増えると共同生活は試行錯誤から始まった。試行錯誤の中から、個々の性格、行動の特徴をつかんでいき、仲間の方も新しい生活に試行錯誤して慣れていったのである。こうして生活の中でお互いを知り、その一人ひとりの障害を頭に入れながら、個々の特徴、特性をしっかりつかんでいったのである。障害特性を個別的に視ていく。これは「なずな園」の共同生活を支える上で十分必要な時期だったと言える。その試行錯誤の中でつかんだ個々の特性を集団の中で位置づけるのである。集団に個を合わせるのではなく、個に集団を合わせるだけでもない。集団と個の共生を試行錯誤の中で見出しつつあるといってもよい。

ウィリアム・シュワルツ (Schwartz, W, 1916-1982) はグループワークにおける理想的なグループとして、「共生モデル」を基盤とした「相互援助システム」をあげている。岩間は、ここでいう「共生」という概念を『もちつもたれつ』の人間社会の本質であるとし、『共に成長していく』視点が共生関係に必要」(岩間伸之、1992) であるとしている。またシュワルツがグループを有機体としてとらえる視点を示していることをもとに、カレル・ジャーメイン (Germain, C) の「適応」の定義から「つまり適応の概念は、有機体が環境に一方向的に合わせる適合 (Adjustment) ではなく、人間と環境の交互作用によって有機体が環境に変化を促し、その環境に対して有機体がさらなる適応的变化をとげるプロセスを意味している。」(岩間伸之、1992) とし「相互援助システムにおける適応とは、メンバーが環境としてのグループに一方向的に合わせるのではなく、メンバーとシステムとの間の交互作用を通して双方に変化を促し、良好な適合状態を形成していくことを意味している。」(岩間伸之、1992)。

原理が試行錯誤してきたことは、このことであると考えられる。そしてその経験から原理は、「治すより慣れろ」と言っている。「慣れる」ということは、共同生活の中でお互いがお互いに慣れていくことである。そして「なずな園」の共同生活は個に慣れ、変化していくための柔軟性を持ったものであったと言える。

## 2. 参加の原則—役割出番期

試行錯誤で個々の特性を生活の中でつかむと、その特性を集団の中で共同生活の中で活かすことになる。そのことが前述した「役割出番」である。B氏の場合、試行錯誤の中から一人仕事を認め、洗濯係や犬の世話をしてもらい、漢字を覚えると受付係をしてもらい、行事予定表に記入する係にもなった。B氏はその他にも食料倉庫点検係、野菜裁断係、養鶏、髭剃り、カラオケ係などの役割を持った。E氏の晩酌のお酒があるかB氏が確認していた。その他仲間の中には、時計係や案内係、養豚主任に風呂係などがあつた。それぞれの特性に応じたできることを共同生活の中で活かしていたのである。そしてみんながその共同生活を支えていくことになった。支え、支えられる関係である。グループワークの原則としてジゼル・コノプカ (Konopka, G, 1910-) が示したものに参加の原則があり、その参加は「利用者にふさわしい役割を提供する」(植田彌生、2006) こととしている。役割を持つことで自己の存在感を高め、可能性を広げていくことになる。

## 3. 健全な集団生活—関係発達期

「役割出番」ができるとそのことを通して、他者との関係が豊かになっていく。

ジゼル・コノプカが健全な集団生活に必要な要素とし挙げているもののなかに以下のようなものがある。

- ①同じような人たち、仲間との間に同一視の機会が与えられていること。
- ②多数の人間との間にあたたかい帰属感を体験する機会が与えられていること。
- ③自分自身を維持し、自己を表現し、他人のなかで自己の得意性を持ち続ける自由があること。
- ④自分の個性をためすと同時に、他人の独自性を享受する機会が与えられていること。

(ジゼル・コノプカ、1967)

役割出番で特性を共同生活の中で活かすことで、集団の中で個々の関係が豊かになっていく。

「なずな園」で行われていた、夕べの集いは、個の特性を活かした集団のあり方を示すものであつた。仲間が順番で司会をし、その日の出来事を語り合う。たとえば重度の脳性麻痺のA氏は、言葉を発することができない。「あー」「うー」としか発音できない。しかし、司会をするのである。「あー」と言えば、皆が起立し、次に「あー」と言えば、礼をするというように。共同生活の中で、自己を表現し、他人の中で自己の独自性を持ち続ける自由があり、他人の独自性を享受する機会が与えられているのである。

原理の長男、真は、そのことを以下のように記している。

「なずなは毎日、夜の集まりをする。その日の出来事を一人ずつ語る。その語りにみんなは耳を傾ける。(中略) みんなが一日の体験を語り合う。そのなかで、事実の認識をめぐる小さな闘争がしばしば起きる。昼間の喧嘩が夜になって再燃する。A氏のように、怒ったら席を蹴って食堂を出ていく人もいる。言葉がうまく出ない彼にとっては、これが自分の表現方法なのである。しかしこれもなずなのみんなが経験を共有し、事実を共有するためのだいじな行為なのである。この毎日の夜の集まりをとおして、個別的な体験が共同体の経験として蓄積され、そこに思想の種がまかれるのである。

(中略) 共に生きるという生活の共同体であり、また喜怒哀楽を共にする感情の共同体である。共生という言葉はこの二つの要素をあわせ持っている言葉である。」(近藤真、1999)

「なずな園」では買ってもらいたい物などがあると、食堂の黒板に書くことになっていた。

字が書けない者でも絵かメモみたいなものを書くようにすすめていた。それを原理か美佐子が判読し、買ってきたり一緒に買いに行ったりするのである。なかには何と書いてあるのか読みとれないものもある。でもゆっくり聞いてやると「MMMMMMMM」が「ノートを買って」のサインだったり、「くへん」は「くろぺん」だったりした。それらのメモを誰も字になってないなどとけなしたりしない。どんな拙い表現でも、みんながそれを受け容れる寛容さを持っており、ここでは表現の自由がりっぱに保障されていた。いっぽうスタッフたちはそこから一人ひとりのニーズをつかみ仲間との関係を密にしていった。原理は、「個の自由と集団の質を高める」と言っている。

このように個と集団の共生を基にお互いの関係が豊かになり、そのことにより共同生活が成り立っていたと考えられる。

そして、そのことが原理の長男、真が記した以下のような生活につながっていったように考えられる。

「私が部活動を終え、学校の勤めを終えて帰宅すると、時計はとっくに七時をまわり、夕食をすませたみんなは、それぞれの部屋で思い思いの時間を過ごしている。テレビの水戸黄門に夢中のFさん。B氏の部屋からはベートーベンが聞こえてくる。E氏はカラオケに興じている。Cさんはお絵かきに余念がない。Gさんは床屋の椅子に座って歌を歌いはじめた。『みかんの花咲く丘』が始まった。なずなのみんなは、一人ひとりが、自分をもっともしあわせを感じられる。自分が満たされる方法をもっている、それは父母や伊藤さんが教えたりあてがったりしたものではない。本人が自分から見つけだし、獲得した方法なのである。」(近藤 真、1999)

質の高い生活であり、「生きていてよかった」と思える日々だったように考えられる。

## 5. ま と め

現在の地域生活支援は個別支援を中心としている。グループホームや就労継続支援に対しても、個別の利用者にどのような支援を行うかが中心であり、そこに重点が置かれている。しかし、現在の小規模化していく施設サービス体系では、小集団だから活用できるグループワーク的な支援が可能であるように思われる。特にグループホームやケアホームなどの生活の場において、従来専門機関で行われてきたグループワークを生活支援の中に活用していくことは可能であろう。そのことによりサービスの受け手としての役割だけでなく、当事者の主体性を高め、エンパワメントを促し、当事者の力を活用した質の高い生活支援が可能になるように考えられる。

共同生活の家「なずな園」の実践はそのことを示している。今後、現在の福祉サービス体系の中で具体的にどのような方法が可能であるか検討していきたい。

また、「なずな園」において仲間が亡くなったときに地域の人が、炊き出しを手伝い多くの方が見送ってくれたことは、この個と集団の共生が「なずな園」と地域との共生へつながり、ノーマライゼーションへと広がっていったと考えられなくもない。このことも今後の研究の課題としたい。

\*本論文は筆者の修士論文の一部に加筆修正したものである。

## 謝 辞

この研究にあたり、インタビューにご協力いただき、貴重なお話を聞かせていただいた近藤原理先生、近藤美佐子氏、伊藤知和子氏、江口協子氏、小国隆氏、大場康司氏、また「なずな園」との出会いのきっかけをつくって頂いた蒲池克彦氏に心より感謝いたします。

## 引 用 文 献

- \* 岩間伸之:『グループワークにおける相互援助システム—ウィリアム・シュワルツの遺産として—』,「社会福祉学」, 通巻47号. p.146 (1992)
- \* 前掲書 p.149
- \* 植田彌生:『集団援助技術(1)』, 杉本敏夫 住友雄資編著,「新しいソーシャルワーカー—社会福祉援助技術入門—」, 中央法規. p.104 (2006)
- \* 近藤原理:『のぎくの道—精薄者と生きて十三年の記録』, あすなろ書房. p.108~p.109 (1965)
- \* 前掲書 p.177~p.178
- \* 近藤原理:『ともに生きるということ』, 明治図書. p.107 (1979)
- \* 近藤 真:『なずなに育って』, 近藤原理著,「地域で障害者と共生五十年—ともに生き, とともに老いる—」, 太郎次郎社. p.123~p.124 (1999)
- \* 前掲書 p.124~p.125
- \* ジゼル・コノプカ (Gisela Konopka).『Social Group Work—A Helping Process—』, 前田ケイ訳, 全国社会福祉協議会. p.52 (1967)

## 参 考 文 献

- \* 近藤原理:『わが家の共同生活』, 読売新聞長崎版「まじわる」(2007年11月3日)
- \* 近藤原理:『なずな園の38年』, 読売新聞 (2000年12月8日)
- \* 近藤原理:『精薄のおとなたちと—家庭的な小集団共働施設「なずな寮」からの報告—』, 鳩の森書房. (1973)
- \* 近藤原理:『ちえ遅れ教育ノート』, 鳩の森書房. (1973)
- \* 近藤原理:『障害児・者と共に育つ』, 明治図書. (1973)
- \* 近藤原理:『あるがままに あたり前に』, 明治図書. (1982)
- \* 近藤原理:『障害者と泣き笑い三十年—ともに生き, とともに老いる』, 太郎次郎社. (1986)
- \* 近藤原理:『共育共生実践ノート』, 明治図書. (1988)
- \* 近藤原理:『共生社会をめざして—私の障害者福祉実践小論—』, 明治図書. (1993)

## 脚 注

- 1 当時の状況を反映するため当時の用語をそのまま使用
- 2 同上
- 3 同上